

會津八一全集

第八卷

會津八一全集 第八卷

定價一五〇圓

昭和四十四年五月十日印刷
昭和四十四年五月二十日發行

著作權者 會津蘭子

發行者 山越豐

印刷者 山元正宜

發行者 中央公論社

東京都中央區京橋二一一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

書

簡

上

編輯者例言

- 一、舊版の會津八一全集の編成にしたがひ、この第八卷と第九卷の一部をもつて、新版の書簡篇にあてた。
- 一、新版の書簡篇は、舊版に収載の書簡を基礎とし、新たに蒐集したものを増補した。
- 一、新版の書簡篇に収載した書簡は、九百九十一通である。そして第八卷（書簡上）に明治三十五年より昭和十七年までの、六百三十六通ををさめ、第九卷の一部（書簡下）には昭和十八年より昭和三十一年までの、三百五十五通ををさめた。
- 一、書簡の排列は、増補の分も含めて年月日の順とし、かつ、書簡番號を付した。従つて、書簡番號は舊版のそれとは一致しない。
- 一、年月不詳の書簡はすべて推定に従ひ、年代不明の分にあつては、明治、大正、昭和それぞれ年代の終りに、また、月日不明の分は各年の終りに一括してをさめた。
- 一、封書とはがきの區別は明記したが、謄寫原稿によるこの區別の明瞭でないものは、編者の推定によつた。新版の編輯にあたり、なほ若干件の誤記あるを恐れるものである。
- 一、書簡の體裁によつて、句讀點の有無は異つてゐるが、本書にをさめるに當つては、適宜に句

讀點を付した。

一、文中、興に乗じて歌、俳句を報じてゐる箇所が少からずあるが、年代によつて、これに濁點の有無がある。今はこれをすべて統一し、濁點を付した。

一、毛筆書きとペン書きとの區別、また、普通はがきと繪はがきとの區別、或ひは用箋の差異等の記載は一切省略した。

一、書簡中には、往々にして、畫圖、字體、或ひは印章等を例示したものであるが、特殊の場合を除いては、小活字をもつてこれを注記するにとどめた。また、紙中の餘白、或ひは封筒の裏面等に認めた追書きは、多く注記して文末に收めるとともに、必要に應じて認めた朱書の箇所を、特に表示する煩はこの際省略した。

一、文中往々に脱字、誤字、文字不明の箇所があるが、脱字を補つた箇所は「ホ」、誤字そのまゝの箇所は「ママ」、不明の箇所および缺字の箇所は□印を入れ「缺」の小活字をもつてこれを示した。

一、特殊の場合以外は、差出人、宛名人ともにその住所の記載を省略した。

一、本巻と第九巻にわたる書簡篇の末に人名索引を付して、收録番號・件數を明かにすることとした。書簡原稿を提供せられた方々に對して深厚の謝意を表したい。

書簡

一 明治三十五年十一月十六日

櫻井政隆宛（はがき）

拜啓 昨日は坪内博士の道學の時間をやすみて演奏會をきゝ拜眉をも致し、なか／＼愉快に暮らし申候。其内にゆる／＼拜芝いろ／＼御話をも承はるべく、御兩君へもよろしく御風聲被成之度願上候。

三博士の肖像に題す。へ秋いづれもすまして御在し玉ふかな これはほんの御笑ひ草迄如此候也。へものゝねに暮れゆく秋を惜みけり 即興如何に候哉。早稻田吟社といふもの此頃當地に出來仕候へ共、小生却而與かり知らず、例の如く超然として高飛車をきめ込み候。呵々。

二 明治三十五年十二月二十二日

櫻井政隆宛（はがき）

一昨日は多人數押しかけての襲撃亂暴は偏に御ゆるし被下度候。あれより周子女子^こを訪ひて例のダンテの肖像相頼み申候。兎も角もと申居候。きゝ女子女史には同夜澁谷方へ泊りゆかれし由、貴庵を出づる小生等と貴庵に向はれたる同女史とは途中いづこかに行き違ひに相成候次第と存候。先は御禮如此候。勿々

上圖は小生所持の錢入れの模様をうつしとりたるもの御一笑被下度候。

錢入れの模様を畫く師走かな
駒込 釋雷兄 貴下

三 明治三十六年頃九月二十四日

會津たか宛（封書）

御たか様

一、いよ／＼御氣嫌うるはしく御勉強の御様子、遙かに欣賀たてまつり候。小生其後變れることも御坐なく候に付き、皆々様御安心被下度祈上候。

一、今回は兄上の蒲團一枚、小生の寢巻一枚、ズボン下一枚（これはあまり悪くなり候に付き、御送り返したすものにて候。豫備のものも幾下りも有之候に付き、別に代りを御心配被下るまでも無之と存じ候。）シャツ一枚（これは小生のにてはあるまじく、少々小く着られ不申）靴下一足（これはアクトに穴があきて段々穴が大きくなる故、御返しいたし御修復を請ひあげ候。）まづ身につくものはこれだけにて候。外に周子の寢巻二枚と威三子へやるべき會話書一冊と、尙ほ外に數十冊のやくざ本をも同封いたしおき候。これ等の書冊は當分全く必要なきものにて候へば、土藏の奥の方へ深く御仕舞おき被下度候。

一、小説澄子、濱子、小生はいづれも讀み不申候。文學科の生徒としてはあまり迂濶の言ひ草と御笑ひなさるべく候。追て此種のものにも眼をさらし、よく相考へて御返答可申上候。

圖書館へ参ればどんな小説でも讀み得る筈にて候へ共、當分は此方面には手を出さず偏に古來の名著を靜讀いたす積りにて候。

一、石黒御きゑさんに俳句御教導のよし、最も興味ある話にて候。御研究の結果は追々拜見致度存じ候。

一、櫻井君へやりたる年始狀は、

此庵は盆だてがんに初日かな

といふ發句をかき、其下に机の上に茶碗や德利や皿鉢の亂置せられ居る狂畫をいがきたるものにて候。

即ち昨年は櫻井方にて年をとり、宮嶋の「盆だてがんに……」の盆歌をきゝ、元日の日に牛込へ歸りて直に認めて遣はしたるものにて候。石黒君は如何様なる解釋を下され候にや。宮嶋君の俳句はあまり名陰にあらず候。之に對する石黒君の解釋尤も妙なるべく候。

一、短刀一口はまさに持參仕候。これも御送り返し申上候。別に代物を御送り被下るにも及ばず候。何かの爲めにも成るものかと思ひて持ち來り候へ共、かゝるものの役に立つことはありて大變、なくて仕合の儀にも有之、尙ほ刃物など坐右にありては無きに過ぎたる心勞も有之る次第に付き、代りなどはくれぐれも御斷り申上候。

一、大高源吾の發句のこと、御解の如く目的の譬打ちを遂げてがっかりせしさを、雲をつくばかり生へたる松の枝が、雪の積るまゝにがっかりと折れて仕舞ツたといふのにいひかけたるにて、稍々巧妙の部に入るべき句にて候。

松といふものは筋くれ立ちて、他の樹木よりも力も元氣もありさうな植物にて、且つ何となく潔き感じのする木なれば、其枝の雪にてサツパリと折れたる處を、自己忠臣等の力抜けせしに比したるにて候。

巧妙とは申せ二百年前にありて巧妙といふにして、今日より見れば何程の事も無之、且つ決して模すべき句法には無之候。

一、行水の句は不出來なり。

行水のたらひの底のぬけにけり

とせば稍々穩かとなれど、これでは又面白味は少しもなし。只今一寸考へ候に、

板塀に行水の水かゝりけり

行水の水流れゆく烟かな

行水にたらひふみぬく一人かな

などいかに候や。一つの景色や場合をさまざまに御考相成候方、却而御有益と存ぜられ候。

一、本日小山九市、今川四郎、片桐覺仕の諸君來訪有之、一所に寫眞をうつしてくれぬかとのこと故、快諾して共に撮影仕候。一軒置いて隣りの藤枝といふ下手な寫眞屋にて撮り候ことなれば、如何様具合にうつたやら出来れば御目にかけ可申候。

先は用事のみ如此候也。

一、尙は兼て祖母様より小生へ御下命有之候周子品行取調方の儀につき、過日叔父よりも來書有之、其折に小生より祖母様、叔父様御兩人あてに申上候返事は、御祖母様にて御聞こし召され候哉同上候。其後とも手がゝりもなく學事も多忙にて、其穿鑿も手後レ手後レと相成居り候へ共、要するに大事なさそうの事にて候へば、深くは御心配御無用に存じ上げ奉る旨、そなたより祖母様へも御はなし被下度候。勿々

九月二十四日夜認む

八一

たか様

四 明治三十八年九月十七日

櫻井政隆宛（はがき）

昨日は本郷へまゐり候へ共、所用の都合上御伺ひ致さず候。歸宅仕候ところ父の手紙あり、例の期限のこと來年七月にてもとより異存なし却て好都合なりとの意を示し來り候に付き、早速申上候。實は參上の上可申上のところ本郷は昨日まゐりしばかり故、乍略儀以葉書貴意を得候。右御承知被下度如此候也。

九月十七日午前

朔

第一

拜啓 其後天氣如何候哉。當地は小生上京後はなか／＼堪へかぬる殘暑なりしに、此處三日ばかりは雨天つゞき。ことに今日は霧雨にして。一層物寒く。學校へも羽織着てゆく人多く候。

在郷中はいろ／＼御面倒かけ候。ことに一方ならぬ御心配もかけ候ことゝ存候。とにかく我等の生活は放逸に流れやすく。やゝもすれば常人の軌路を脱出することありて。あとより之を思へば苦悶と蹉躓と悔悟との跡ならぬはなく候。然れども我等は一定の主義と一個の理想とを把握し居るものにて候。全く世間人の思慮以上に一步を進めて美術、文學、道德、哲學、宗教等の本體は何ぞやと思念を碎くものにて候。されば我等の行爲が甚しく常道を逸するときも世常の所謂不行儀、不作法、不謹慎、不品行などいふものとは自ら區別せられざるを得ざるべしと被存候。即ち嚴然として叱責すべき過失といふよりは同情、憐憫の情を以て寛恕せらるべき缺點と申すべきものと存じ候。頗る我儘なる議論のやうなれど。思ふことありてかきつけ候。

且つは瓣疏の一端ともなるべきかと存じ候。

さて例の櫻井氏より求婚の件は。御承知の通り小生出發以前に。一先づ其許并に父母始め家内親類の意見をまとめ。出京匆匆氏に面會して回答いたし候處。氏も頗る満足の意を表し居られ候。さて次に來るは媒介者の然るべきものは誰にすべきかといふことゝ婚儀の期限は何時にすべきかといふことゝにて候。媒介者のことはしばらくおきて。期限のことにつきては同氏の希望としては來年の七月頃に願はるまじきやといふにて候。其理由は今年中は家計の都合もあり來年七月は暑中休暇にて學校の方も手がすぎ。四月よりは帝國文

學編輯事務の方も幾分暇になり。又月給も七月より多少増俸さるべき管等の諸種の事情に歸し候由にて候。小生の考ふるに。我家も承知の通りなる財政にて父母も何よりさきに仕度金の乏しきことをかこち、『今年中などいはるとも用意は出来かねる』といひ居らるゝ場合なれば。彼方より來年七月との希望あれば。當方の爲めには却て頗る好都合なるべく。來年七月決して遅かるまじく被存候。是に於て此事先日父上に相談に遣はし候處。父母祖母様ともに同意見なりとの御返事を獲候に付き。早速櫻井氏に其旨通知仕候ところ。これまた頗る満足の意を以て迎へられ候。

次に残るところは媒介人の撰擇にて候。これ頗る形式的の事に屬するやうに我等は存候へども。事いやしくも人生の大儀に關し候上は最も慎重に其人を求め申すを至當と致すべく候。此事につきては他日更に書面可仕候。たと期限のことにつきて其許に於て別に異存故障あることもなかるべくと存じ候へども。經過の一般大略右の如くに候に付き左様御含み被下度候。

本日更に櫻井氏より手紙あり。未だ媒介人は定めざることなれど已に兩方にて合意いたし。親々も賛同いたされ候ことなれば書簡の交換によりて意思の交換を試みたし。若し大兄の許可を得ば直に實行致し度しといふやうなる文意にて候。且つ其許の寫眞あらば貰ひ度しと有之候に付き。寫眞に添へて、意志の交換の最も必要なること、さしつかへなきこと、當然なること、を返事致しおき候。寫眞はハート形の寫眞挟みの中に入りしをあのまゝに送り候。これまた左様御承知有之候やう申入れ候。

いろ／＼希望注文などあらば。我等へ御申送りなされ度候。我等次男ではあり他家の相續人ではあり頗る出過ぎたる事のやうでもあり候へ共。今日のところ外に人もなければ致方なき事にて候。家兄に對してもむしろ相濟まざる譯にて候。餘は後便にゆづる。 匆々

九月十九日夜

たか殿

第二

小生在郷中の借金を左に記し候に付き。内へ御話しの上御拂ひおき被下度候。いづれも書物にて候。

北光社 『光風』

三十五錢

萬松堂 『狂言全集』

四十八錢

” 『一茶俳句全集』 二十二錢

右の如くにて候。此外に萬松堂より買ひたるもの一二冊あれども、いづれも人よりの頼まれものにて現金にていづれも小生の財布より支拂おき候に付き左様御含み被下度候。

又寄居の後藤といふ本屋に

良寛上人歌集

といふもの一冊有之候。これも友人の頼みにて一部所望に付き。内へ御話しありて御買ひ求めの上。開き封にて四錢切手を貼り。御送り被下度候。《たしか二十八錢だと申し候定價は三十錢也》

小生此度上京の節持参せし土産物は全體に於て失敗にて候。第一養生糖はどうしたものか濕り居りて箱の内側へ粘着し。且つ一粒々々に之を検すれば丸く出来て居ず。《糖》といふやうに恰も金米糖の小さきものゝ如くなり。先日引田氏を訪ひしとき一見して頗る驚き申候。第二に梨子（荷物にて市嶋氏に贈られしもの）は今年は當地には非常に澤山にて且つ價も甚だ低廉なることにて候。今年は未だ當地の梨子は喰ひ申さず候へ共、味も頗る美味なるものも多しとの事にて候。若し送るならば春さきになりて當地には梨子少き時にせばよかりしに残念のこと致し候。

今一つ申上おき度きは先日赤坂にてはんちやをたづね。芝の羽田氏をもたづね候に。いづれもよろしく申され候。然るところ若林さんの話に『先日大竹さんから手紙ありて其手紙によれば北越學館の同窓會で出港し久々にてかどやの御厄介になりしに非常なる御繁昌の御様子云々とあり』とのことにて候。なか／＼うまいものにて候。小谷氏より手紙にて申送られ候ことゝ存じ候。それを小谷とはいはず大竹さんからかく／＼の手紙だがほんとかと山をかけるところ感服の至にて候。兼ての御含めも有之候へば。軽く宜加減の返事は致しおき候へ共。こんなことがあつたといふことだけ皆々様御吞込みおき被下度候。夕飯をよばれて歸り申候。しかし小谷君を捕へて角だてゝ物を云ひなざるゝにも及ぶまじ様被存候。隨分面白き手加減なるべく候。乍序おきんどのに申候。井口氏は小生雜用の爲め未だ訪問せざりしに。一昨日學校にて松山君にあひしかば。同氏の轉居さきをたづねしに。矢張りもとのところなりとの事にて候。轉居はせざりしにや。又同氏に贈るつもりなりしゆかりは他に應用することありて。其方へまはし候。御序あらば一斤入一箱小生のところへでも。又直接同氏へでも御送りなさるべく候。右御頼み申上候。

九月十九日夜

八一

たか殿

○別紙一通、向の内へ御届け被下度候。

○小生風邪の氣味にて候。尤もたいしたることはなく候。本月中は聊か閑あるべく來月よりは多少忙殺せらるることにて候。

○石黒女史は未だ出京せぬにや。

六

明治三十九年一月二十二日

櫻井政隆宛（はがき）

歳暮正月は一方ならぬ御厄介に相成候。此頃また／＼意氣少しく振はぬ方なるに、例の如く銭はなし不平もボツ／＼あり結局大々の沈黙といふことに致し候。讀書もすゝまず只今 Virgil をよみ居候。八重子の貞はどことなく小生氣に入り候へ共、どこがよいのか自分にも確とは分らず候。小供の時から見て居る顔は常に此様にて候。抱月より Wordsworth の Excursion につき文を徴せられ迷惑至極に存候。學校はどうるさきもの可無之候哉。そのうちに突然御うかゝひ可致候。

正月二十二日夜認む

十 明治三十九年三月五日 伊達俊光宛（はがき）

昨晩は失禮致し候。二時に就眠、今朝八時に起きて目がひり／＼致し候。清談なほ耳にあり。

“Poesis est Pictura loquens, mutum Pictura Poems.”

“I loved thee ere I love a woman, Love.”

“Ποιησις εἰς πικτωρὸς ὁμιλῶν, τὴν δὲ πικτωρ, ὥρραφον λαλοῦσα.”

花七日物喰はずとも書畫の會

味摩詰之詩。詩中有畫。觀摩詰之畫。畫中有詩。

Ut Pictura Poesis erit.

八 明治三十九年四月二十二日 櫻井政隆宛（はがき）

また／＼御休暇の由羨ましく奉存候。當方試験は一ヶ月のあちらに迫り來りしも、未だ例の海風主義にて毎日勝手なものを讀み勝手な熱を吹き居り候。今日の風の強さにも呆れ入り候。此風止みて満都の春色は全く

縁と可相成候。今日二階の欄干に立ち得意の遠望を試み候。へ風吹けば今日をかぎりと行く春の花は散りつゝ青柳の糸のみだれの洗ひ髪 黄楊の小櫛がよいわいな 卽興にて候。絃に乗るか乗らぬかその邊までの責任は無之候。但し、あさくともにて御願申上候。 勿々

(中央橢圓形黒地に朱書で) 父母を辭して書窓の柳かな

八朔痴人拜

九 明治三十九年五月六日 伊達俊光宛(はがき)

シェークスピアの肖像をきりぬかん爲めに、又サッフォーを御返しせん爲めに御うかどひせしなりけり。例のシェークスピア及びスキンバーンの肖像きりぬいておいてくれ玉へ。本郷へ出て Shakespeare's Landを二枚かつて來た。一枚は御母さんの實家、一枚は嫁さんの家だ。

アンの舊家に題す

鳩ないて君遅き日の夕かな

マリーの故郷

日ぐるまや昔乙女が家どころ

五月六日

八朔

沙翁紀念をいま一枚考へてくれたまへ。日附は四月二十三日。

一〇 明治三十九年五月二十九日 伊達俊光宛(はがき)

南方の艶色は腰にすがり腕にまどふの趣がある。北方の意氣は眉に聳へ肩を脅かすの慨がある。ジュピター